

明治期

仁 淀 川 仮 橋 (中央)



仁 淀 川 橋 (現 在)

十年(二六五) 国県道に正式架橋の促進があり、これによって、仁淀川に本格的な橋梁を架設する動きが表面化したのは、明治四十一年(二六六) 七月で、「土陽新聞」によれば、この橋に関係ある町村長は、連名で明治四十二年度(二六七)の県予算に建設費の計上を請願している。もちろん表面化する以前からすでに問題となっていたのであろう。

仁淀川橋架設に着工したのは、明治四十四年(二七二)であった。四十二年(二六八)に工費八万一千円、人夫二万六千四百人をもって竣工を図るものであった。この年八月十五日には、仁淀川増水二丈一尺(六m)という水害もあったが、工事はその後で開始され、翌四十五年(二七三)には本格的に工事は進捗する。そのため、東岸橋のたもとの住民は地盤の嵩上げに迫られ、その経費に苦しみ、県費一千円の補助を申請している「土陽新聞」。その結果は伝えられていないが、ついに大正二年(一九一三)には堂々たる鉄橋が完成する。時代の推移を語る事業であったことはすでに前述した。渡し船、仮橋に対する不満も非難も解消され、歴史の進歩を人びとは喜んだものであろう。

さて話は前後するが、以上のような幹線道路に対して、久し